8/14 朝日

戦争記録 祖父が残した願い

薬剤師 （福井県 42）

7月15日に94歳で亡くなった主人の祖父の遺品を整理していて、「私の半生」という10ページほどの小冊子を見つけました。祖父が米寿祝いの会で配ったもので、大半が戦争の記録でした。

1944年に召集された祖父が向かったのは中国大陸。武昌（湖北省武漢）を皮切りに転戦を重ね、多くの上官や仲間を失ったとありました。指を切断して遺骨代わりに持ち帰ったこと、まだ息のある人を地中に埋めざるを得なかったことなど、悲惨な一面も生々しく記されていました。けれど戦争に対する思いは書かれていませんでした。

聞いておけばよかったと後悔した時、ふと思い出しました。去年の衆院選、祖父は比例区で護憲派野党に投票したのです。保守派の多い農村で長年保守政党の候補者を応援し、演説会にも行っていたのに。意外に思っていましたが気付きました。どんなに体が弱っても投票に行った祖父。それは「もう絶対戦争はさせない」という強い決意を表していたのではないかと。

祖父の思いを受け継ぎ、子どもたちに戦争の悲惨さや残酷さを伝えていきたいと思います。

18歳の特攻隊員 生き延びて

無職 （奈良県 88）

1945年6月、福島県郡山の海軍航空隊に集った約20人の特攻要員から、18歳の私が出撃第一陣に指名された。茨城県日立市の自宅で家族に別れを告げ帰隊。沖縄への飛行経路の指示があり、出撃を待つ間に米機の襲撃を受けた。

7月半ば、司令室で意外な命令を受けた。「命は世に役立たせるべきもの。殺し殺されるためのものではあるまい。今後、私が直接出す命令以外、従ってはならぬ。居住壕から出るな」。以前同じ隊だった先輩2人は木更津から出撃し、1人は8月14日に離陸したと聞いた。そして終戦。玉音放送には涙がにじんだ。口惜しさか、命拾いしたという涙か。

8月下旬復員。日立市は艦砲射撃と空襲で灰燼と化していた。自宅は焼失、祖母は家の下敷きになり亡くなった。母と弟妹と共に親戚を頼り京都、兵庫、広島を転々。栄養失調が原因で母が11月、翌年弟が他界。私は21歳の時、大阪で小学校助教諭の職を得て退職まで教員をした。

戦後70年。私の88年には消えない汚濁がある。過ちは自ら認め、記憶に深くとどめることにより、成長し新生できる。国家にもそう望む。

8/14 朝日

貧しくても 満たされた平和

無職 （大阪府 72）

大阪市で生まれた私は終戦後、父親の故郷徳島に家族全員で移った。剣山に続く標高約千㍍の村にある10軒ほどの集落だった。私はまだ3歳になる前だった。

小中学校まで歩いて1時間。雪深い冬も破れの目立つ足袋にわら草履で歩き、霜焼けや、あかぎれ続き。

主食は、麦ご飯が多かった。時折、ヒエご飯やアワとヒエの混ぜご飯。おかずは山のように積まれたタクアン。保存食のカズノコが高知から届けられたり、サツマイモやそのツルが主食になったりすることもあった。動物性たんぱく源の補給のため、わなで野ウサギや山鳥、キジなどを捕獲する方法を兄に教わった。現金収入は無く、棚田を開墾して、自給自足していた。

高校を卒業し大阪に戻って結婚。子どもや孫たちにも恵まれ、願い事は全て満たされた戦後70年。ひもじい思いはしたが、苦しかったとは思わない。忌まわしい戦争の不安が全く無かったからだろう。実に平和であった。

安全保障関連法案は成立するのか。戦争参加でこの平和が崩れてほしくない。

100歳になる母 徴兵免れた父

無職 （大阪府 68）

10月で100歳になる母は、今も戦前や戦中のことを話してくれます。特に21年前に86歳で逝った父の、大戦末期の徴兵検査をよく思い出します。母は就学前の幼い3人の娘を抱え、義母を含め女性ばかりの5人家族になってしまうと、途方にくれたようです。

しかし父は生まれつき虚弱体質で、医者からは30歳くらいまでしか生きられないと言われていました。それが幸いし、徴兵検査ではねられて帰宅。その時に近所のおばあさんが母だけにこっそり話しかけたそうです。「兵隊にならんかって良かったですね。戦争で死ぬなんて犬死にですよ」。当時の人の心の底の本音ではないでしょうか。でもそんな言葉は普通は口外できません。隣人が隣人を監視する社会だったからです。

特定秘密保護法成立、相次ぐ報道機関への威圧的発言、参院で審議中の安保法案。一連の流れは戦前の暗い社会に戻そうとしているように感じます。皆さんに考えてほしいのです。今の政治の方向で良いのかと。

変わらない沖縄の基地集中

通訳案内 （東京都 62）

ニューヨークで彼に会わなかったら、今でも沖縄のことを何も知らず、何も感じない自分がいたかもしれない。

日本のバブル景気が終わりを迎えようとしていた1990年ごろ、駐在していたニューヨークで、沖縄出身の男性と知り合った。彼も駐在員であった。初対面で意気投合し、何時間も語り合った。その中で、彼が「沖縄は差別されている」と語った。当時、私は沖縄のことをほとんど知らなかった。「差別」が何を意味するのかわからなかった。いま思えば恥ずかしい限りだし、失礼の極みだが、本土の人間の私にとって、沖縄に米軍基地があるのは普通のことで、差別という感覚はなかったのだ。つまり何も考えていなかった。

その後、帰国して沖縄のことが報道されるたびに、少しずつであるが沖縄のことを考えるようになった。

戦後70年、沖縄の状況は変わらない。日本にある米軍基地は沖縄に集中している。日本全土の防衛のためにあるのだから、日本全国で公平に負担すべきではなかろうか。

8/14 朝日

原爆孤児への慈愛 深く感謝

無職　（兵庫県　79）

広島駅で両親に見送られ学童疎開に向かって、はや70年。敵機飛来は連日。建物疎開で自宅が取り壊されるとなれば疎開もやむを得ない。取り壊しの始まった家屋では、砂塵の中を人が影絵のように働いていた。

広島県北部の山寺での集団生活では飢餓に苦しみ、郷愁にさいなまれた。8月6日原爆、15日に終戦を迎え、子供らは家族の元へ帰って行った。原爆に両親と妹を奪われ、1人取り残された私は寺の本堂の片隅で悲嘆に暮れた。親戚宅を渡り歩き、1947年に広島戦災児育成所に入り、3年半養育を受けた。その間、身命を賭して育成に携わられた保母の方々の慈愛は深く脳裏に刻まれている。

原爆が私から奪い取ったものは計り知れないが、後に受けた心ある人々からの恩も決して少なくない。その方々との邂逅があったからこそ、今日の私がある。

その恩師も、大半は鬼籍に入られた。原爆孤児として養育を受けた者が世間から目を向けられることはままあったが、慈しんで下さった方々への世の関心は薄く、報謝はあまりにも乏しかった。70年後の今も、心苦しさを覚える。

公園のほとけ様 意味知った

小学生　（和歌山県　10）

先月、学校で1945年7月9日の和歌山大空しゅうをけいけんした人にお話を聞きました。そして、戦争で生き残った人も泣くのをがまんして、とても苦労したんだと思いました。

お話で、その方のお姉さんが空しゅうのぎせいになったことや、ぼくの家の近所の汀公園にひなんした人が、まわりを炎につつまれて、火にやられてたくさん亡くなったことを知りました。ぼくは小さいころ汀公園で遊んでいて、なぜほとけ様の像があるのかなあ、と思っていました。それは戦争で亡くなった人の「おはか」だったのです。

ぼくの家はお寺で、当時16歳だったおじいちゃんは別のお寺にそ開していて無事でしたが、空しゅうで家の寺は焼けました。その時おじいちゃんのお父さんとお母さんは寺の大事な絵や像を埋めてあったうら庭のバベ（ウバメガシ）の木の下にのがれて無事でした。今もあるバベの木は命のおんじんだと思いました。戦争は怖いです。もう二度とありませんように。